OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	そのキスシーンの嘘っぽさ
Author(s)	大北, 全俊
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 2, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7194
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

そのキスシーンの嘘っぽさ

『サボタージュ』より

大北全俊

キスシーンで映画を締めくくる。なんだかそこですべてが解決したような気がする。もし、登場人物がそれまで不幸であったなら、そのキスでその人は救われたような気がする。観ている僕は、そこで、何らかの欲求が満たされる。

しかし、ヒッチコックの『サボタージュ』のキスシーンは、ごく典型的なキスシーンなのに、とても嘘っぽい。そのキスによって、物事が解決したとは思えない。それなら、その映画はとてもちぐはぐな終わり方をしているかというと、僕には、かえってとてもリアルに思えてくる。

アメリカから渡ってきて映画館を経営しているヴァーロック氏は、副業で破壊工作員をしている。彼には年の離れた若い妻がいるのだが、彼女を家政婦が「ヴァーロック夫人」と呼ばない限り、彼らが夫婦だとは思えなかった。彼女はヴァーロック氏の副業についてなにも知らない。映画館の経営は破産寸前なのに、一家の暮らし向きはそれほど窮乏していない。それなのに、彼女はどこから金が入ってきているか疑っていない。

映画館の隣に果物屋がある。若い刑事テッドがその店の店員になりすまし、ヴァーロック氏の動きを見張っている。何かと家のことに入り込んでくるこの若い刑事テッドを、夫人はいぶかしく思っていた。彼女には弟がいる。「あの人は弟に優しいから」。彼女が年の離れた夫のそばにいるのも、テッドと親しくなるのも、二人とも弟に対して優しいからだ。

ヴァーロック氏に対する見張りが厳しくなり、思うように破壊工作をすることができなくなる。彼は、爆弾をロンドンの中心部に置きに行くのに弟を使う。当然、弟は自分の運んでいるものが時限爆弾だとは知らない。彼自身の不注意と、雑踏の中、思うように進むことができないため、爆弾は彼を乗せたバスもろとも吹き飛ばしてしまう。

弟の死とそれを引き起こしたのが自分の夫であることを夫人は知る。ヴァーロック氏はいろいろ言い訳をする。「あのテッドさえいなければ私が爆弾を置きに行った。弟を殺したのは彼だ」。彼女は、結局夫を殺してしまうのであるが、その殺人は果たして「復讐」なのだろうか。

テッドに向かって彼女は夫のことを「無害な人よ」という。およそヴァーロック夫妻の間に性的な雰囲気はないのに、言い訳のシーンで「私たちには未来がある。望むなら子供を作ってもいい。」と、ヴァーロック氏はいう。夫人共々、観ている僕もどきっとする台詞だった。突然、生々しいものにふれる。夫人が夫を殺してしまうのをどこかで当然のことだと思いながら、その感情はどこからくるのか。

言い換えれば、ヴァーロック氏に対する嫌悪はどこからくるのか。弟を殺したという道義的な責めを彼に負わせているのだろうか。実のところ、爆発のシーンは絶妙で、爆発時刻までの切迫感とは対照的に、肝心な爆発はまるで石が転がるように起こってしまう。だから、本当に弟が死んでしまったのか、そのことの意味することは何か、はっきりしないまま、軽いショック状態のままヴァーロック氏の言い訳を聞く。彼に対する嫌悪感は、「子供を作ってもいい」というその台詞が喚起する、それまで予想していなかったその夫婦の性的なイメージ、年が離れたその夫婦のセックスのグロテスクさ、そのあたりからくるのかもしれない。その性的な嫌悪感には何ら根拠はない。それにも関わらず、微妙に、弟殺しという道義的な責めがその嫌悪感を覆い隠し正当化する。ヴァーロック氏に対する殺意は、「誰が殺した」という責任論からくるものではなく、かすかな落ち着きを見せる夫人が料理をよそっているとき、ヴァーロック氏がぼやく「またキャベツを焦がしている」というその台詞、その口臭からくる気がする。そうして、彼らの唯一の肉体的接触は、夫人によって、ヴァーロック氏の腹部にナイフが刺されることによってなされる。

このようなどっちつかずな気持ちの時に、テッドが入ってくる。彼はずいぶん前からあからさまに夫人に好意を寄せているのだが、「君の痛みは僕の痛みだ」と口説き、投げやりな彼女に「弟を亡くして生きる目的をなくしたのか」と詰め寄る姿がヴァーロック氏と重なる。夫人は、経済的に、誰か男性に「面倒」を観てもらうほかはないことが自明のことになっている。キスは夫人の方から誘われる。弟を殺され、自ら夫殺しまでして憔悴しきった彼女は被害者であり、その彼女を支えるテッドの存在、そして彼とのキスは、被害者救済の物語、「理想的な」男女関係の成立のように見える。でも、ヴァーロック氏に対する嫌悪が道義的なものに収まりきらないために、夫人と二人の男との関係の間には、「観たい」セックスと「観たくない」セックスの違いしかないように思えてくる。ヴァーロック氏の破壊工作に夫人は本当に無実だと言い切れるのか。彼が年老いていたというだけで、僕は、彼をセックスから排除してはいなかっただろうか。

そのキスシーンは嘘っぽい。というよりも、そのキスが「理想的」であることや、物事を解決するというキスのもつイメージそのものが嘘っぽい。だからそのキスが嘘っぽい分、そのキスシーンはリアルだ。

＜映画情報＞
『サボタージュ；SABOTAGE』
1936年　イギリス映画　76分
制作：マイケル・バルコン
監督：アルフレッド・ヒッチコック
音楽：ルイ・レヴィ
原作：ジョセフ・コンラッド「諜報部員」
脚本：チャールズ・ベネット
出演：シルヴィア・シドニー、オスカー・ホモルカ
　　デズモンド・テスター、ジョン・ローダー

実はこの映画は、キスシーンで終わるのではない。「笑い」ながら夫人の殺人は隠蔽される。観終わって、ある奇妙なシーンが印象に残っている。水族館で、通りすがりのカップルの会話で、
男「牡蠣の栄養価は高いんだ。産卵の後、雌は性転換する。」
女「当然よ。」

（おおきたたけとし・博士後期課程）